

試し読み

詩誌

空想

第六号

# 右肩ヒサシ

2012年『散文詩集「鰐」「ドーナッツ」ほか』刊行  
Kaz-s@mti.biglobe.ne.jp

## マナコ

暮れない夜でした。濃紺の空に掛かる満月、それは遙か彼方の球体というより、この世の一部を切り取って開いた窓のような白さでした。僕が骨壺を抱え、藪柑子の小道を抜けて木橋を渡る頃、何か途方もなくこまごまとした囁きが、窓となった月から零れてきます。それはかつてこのあたりに転がっていた、あれこれの首の遺言として地上に注ぎ、昔々の陰湿な静けさで足を濡らしもするのです。

道は腐葉土の厚く積もった獣道。そぼそぼと降り始め、やがてこと切れるようにしてやみ、またそぼそぼと息吹き返して続く雨よ。地表に滲みる雨水を僕の藁草履が踏むと、緩んだ藁の間がじゅぶと泡立つ。じゅぶじゅぶと泡が立つ。足裏だか、脹ら脛のむっちりした盛り上がりだかに、蛭のような蛆のようなものが四つ五つまとりついて離れない。皮膚の上が脚絆に蔽われた僕の足。月のない暗闇におぼつかない提灯の明かり。足を這うものの正体を確かめることはどうあってもかなわない。

肩に食い込んだ駕籠が重い。僕が担ぐ駕籠の客は荒く生臭い息を吐く。大きく息を

吐けば喉に掠れた音が響く。息を吸えば四囲の精気を根こそぎ奪い、ますます駕籠を重くする。それにしても反対側を担ぐ者は誰であっただろう。山のように巨大で暗い影が後ろから無言で駕籠の一方を支えている。後ろがいるからぐいぐいと前に押されて、少しも足を止められない。そもそもなぜ僕はこの駕籠を担ぐのだ。何処へ行くのだ。僕は誰だ。この先曲がった道の向こう、茂みの影を雨が打つ真つ暗なさざめきの彼方。そこに何かがあるというのか。わかっているのは、もうすぐ僕が何かに首を搔き切られるということ。切られた首が一旦ぴよこんと跳び上がった後、ぬかるんだ道の上を間の抜けた表情でバシヤバシヤと転げ始める、そんなことだ。どうしようもなく僕は空を仰ぐ。無数の雨滴がこちらへ向かい、たちまち顔を濡らし地表へ向けて流れ落ちる。消える。

六つの官界を引き裂いて、けたたましい笑い声が響きます。

その鳥の声でようやく僕の意識は醒めたのです。昔の人の昔語りには耳を傾けすぎてはいけません。気がつくとも僕は満月の光の中で、もとのように錦の布に包まれた骨壺を抱え、しよんぼりと歩き続けていました。かたことかたこと。陶磁の壺の陶磁の蓋が落ち着かない。少し歩くと少し、小走りに駆けると駆けた分だけ大きく、壺から蓋

# ふたば

## 略歴

1978年生まれ。

『むかし私がおばあさんだった頃。』

<http://itsutsuba28.blog.fc2.com/>

## シーツとムスメ

シーツというのは、よく晴れたまっぴるま

置き去られた一枚のみずたまりのことです

風はなくても波紋というのはまるくいくつも広がるものです

それはシーツの裏側でうまれなかつた子どもたちが

跳ねて遊んでいるせい

短い手足で影だけじゃぶじゃぶ

鳴らして遊んでいるわけです

今朝、このシーツを地図模様濡らした犯人であるところの

つまりうちのムスメがまったく悪びれもせず

その様子を眺めては仲間に入りたそうに

うずうず

羨ましそうにしているもので

なんてわるい子なんだろう、なんてわるい子！

やっこのこと干し終わったシーツがつかまえていた眩しいものぜんぶ  
ムスメのあたまにぶっかけてやって

わやくちやのざばざばのくしゃくしゃのおひさまの匂いじやぶじやぶ  
おもいしらせてやらねばなりません

ma-ya

1986年、秋生まれ。



## magic hour

三角に座りいい子みたいにして暗くなってく空をみている

店先で雨上がり待つ女性より雨に打たれるあじさいがすき

予報士の気まぐれはもうたくさん、と雲の散らばる本日は晴れ

ブラウスの背の留め金を掛けるのが苦手なふりをする君の前

牛乳のうわずみに似たトレミーの星団員になるという夢

新しい楽譜をひらく 蝶を追う子どもにかえるピアニスト達

たくさんの数ならべても君はなくコップに挿した花が減んだ

水中にいるような夜だったからなみだをこぼすこともよかった

輪切りした檸檬をはちみつ漬けにしてあす失恋の予感のする夜

# 埋 ト ー リ ヤ

# 花冠

もう少しさきを聞かせてください

あなたの

窓硝子に反射する瞳のむこうの

夕映えの底の澱のように きつとまだぼんやりとした

百日紅は過露出ぎみの 見慣れた路地にとつぜん

ぽっかりあいた うさぎ穴

足を震わす暇もなく かきまわされちかちかと

あつ

言葉が足りない

滑り落ちる すべすべできゆうくつな黒い壁のいちめん

すきまなくへばりついている 剥き出しの皮の不可逆性

たいいく座りで 耐えなければならぬ

生まれ出るのではなく　そのさかさの子宮  
あつ

言葉が足りない

おもいもよらない　黒いくろい恐怖のすべすべで  
奪われた　だんまりが伸しかかる

金木犀の雨あがり　のどをつまらせる

においがする　飲み込んでしまったものは  
どうして

散乱し続ける黄金の羽虫　いっせいに

動き出す直前の停止　直視することのできない

はきけがする　飲み込んでしまった

叫べばよかった

助けて

細い腕にびっしりと黄金の羽虫　いっせいに

蠢いて流れ出して　良く晴れた雨あがり

指さきにこびりついたにおいの　強い飛翔音

胸の底で交じりあう

# ふるる

1970生

HP「ふるるの詩のおきば」は

<http://www016.upp.so-net.ne.jp/fururu/> です。

# はつかねずみ

はつかねずみ

きみの美しい視線が

ぼくの背に注がれていた時

ぼくはオールをこいで

春は

緑のビーズをこぼしたみたいに

あちこちで転がり跳ね回って

きみ

きみの手の中で飼っている

はつかねずみ

白の

真綿の中で眠るんだね

オールが舟のへりに当たって

水しぶきが

あがる

ぼくはきみの手の中の

はつかねずみを見ようとして

逃げないようにそつと

かがみこみ

キスをする

きみの手と

はつかねずみに



# 田中恭平

1987年生まれ。男性。

## 中野・須黒野

秋のその名残りのために早起きし繋いだ指をゆっくり離す

きのうまで香りし花はきみの去る冷たき昼の傍にありけり

右肩にあなた頭を寄せたときふたりは夜を中心でした

夜明けて月より白いきみの脚そつと水面に揺らいでいたり

目が覚めて隣にわたしが居ないなら一度でいいよ捜しに出てね

冷たい頬へと口を寄せるたび背中  
の翅はしずかにひらく



現代怪談実話

マジで  
ヤバい家

他六篇

## マジでヤバい家

〇さんに聞いた話。

〇さんは学生の頃、短期で引越しのアルバイトをしていた。

約一ヶ月のアルバイト期間も終わりに近づいた、ある日のこと。

彼は先輩社員と二人で、あるマンションへの引越しを担当することになった。

依頼主は、一人暮らしの若い男性。

荷物も少なく、神経質そうなタイプにも見えない。

これは楽な現場だな、と思っていると、搬入経路の確認をしていた先輩が戻ってきて、ぼそりと言った。

「おい、この家マジでヤバいから気をつけろよ。風呂場、見ないようにな」先輩の顔は真っ青だった。

いったい何がマジでヤバいのかと訊ねても、

「どうしても気になるなら自分の目で見る」

としか言わない。

いったい風呂場に何があるのか。

その理由はすぐに分かった。

ユニットバスの隅に、女がいた。

髪の毛の長い、がりがりに痩せ細った女だ。

女は、長い間日光に曝されて焼けた古紙のような、黄褐色のワンピースを着ていた。

顔色は蠟のように白く、深く窪んだ眼窩に光はない。

まるで、髪の毛を生やした骸骨のようだった。

驚いたOさんが声を上げると、女は彼のほうをちらりと一瞥したが、またすぐに興味なさそうに俯いてしまった。

Oさんは黙ってユニットバスのドアを閉めると、作業が終わるまで、二度とそのドアを開けなかった。

「先輩、僕、初めて幽霊見ました」

「俺も昼間は初めてだな」

まるで、夜になら珍しくないような口ぶりだった。

# たけだたもつ

こっそりと詩を書く男の人

<http://kossoritosi.blog.shinobi.jp/>

# 恋

会議室を人が歩く

金属や樹脂などでできた

冷水機のようなものがあって

その向こうに浜松町が広がっている

どこまで行っても僕には体しかないのに

ポケットに突っ込んだはずの手だけが見つかからない

誰かの代わりに死んであげたくなるけれど

本当は僕の代わりに

誰かが死んでいるのかもしれないなかった

あたたかな陽に包まれて

恋人とそんな恋の話をしていたと思う

たぶんずつとしていたと思う



# 結婚式

蛇口をひねると

シャワーから

大切な恋人が出てきた

大切だから

名前をつけた

お互いの名を呼びながら

シャンプーとリンスの前で

永遠の愛を誓った

そして二人で

排水溝に流れていった

葉月二兔

## October 6, 1979

ウイリアムス

火の尾、白地に

ハーレムで父親は子供の目の前で頭を打ちぬかれる。

朽ちた軀の上で、麦はその色を染める。麦の穂の、

風に捧げられる憂鬱に下さいますよう。

カルテの上に立ち止まわれた方位に

あるいは櫂の枯れたカテドラル、彼の、信じて

いない冷たい足もとの火、青い目をした朝摘みのプレアデス

呼べと言う、叫べと言う、

かつては石だったものの陽子が時間を供給する。

*Dendrobates* が卵をぽつぽつとクラゲに孵して散る。

それが笑ったのかどうか知りませんが、子供の前に触れるごとに反復するマリア、虻をともなつて

綿花は北極圏から飛びたつ。

眼の見えぬ稚児に成り果ててしまったエルサレムを巡る類縁性。オシリスの分娩に立ち会う。

ウイリアムス

火の尾、細やかな色を食いつないで、  
足音

と言う、見えませんでしたと言う。

カーテンから剥がれていく  
触れるごとに火に



詩誌  
空想

第六号